新藤兼人賞
SHINDO KANETO AWARDS

金　賞	**HIKARI 監督**	**『３７セカンズ』**
銀　賞	**内山拓也監督**	**『佐々木、イン、マイマイン』**
プロデューサー賞	**岡本英之氏、高田 聡氏、山本晃久氏**	**『スパイの妻＜劇場版＞』**

第２５回授賞式

2020 年 12 月 4 日（金）如水会館 スターホール

主催： 協同組合 日本映画製作者協会

特別協賛： 東京テアトル株式会社

松竹株式会社　東宝株式会社　東映株式会社　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

日活株式会社　日本映画専門チャンネル　株式会社ＷＯＷＯＷ

株式会社ＩＭＡＧＩＣＡ Lab.　株式会社ファンテック　Palabra 株式会社

日本テレビ放送網株式会社　株式会社テレビ朝日　株式会社ＴＢＳテレビ　株式会社テレビ東京　株式会社フジテレビジョン

後援：文化庁

金　賞

HIKARI 監督『３７セカンズ』

監督・脚本・プロデューサー

受 賞 者 コ メ ン ト

このたびは、こんなに素晴らしい賞を頂けて感無量です。ありがとうございました。もう、全部、言うことを忘れてしまいました。
この作品ができるまで本当に長い時間がかかりました。今日、主人公の佳山明ちゃんが足を運んでくれたのですが、彼女に出会ってからも、たくさんの方々に支えをいただきました。女性監督、初長編映画、主人公は演技をしたことがない、そして障害を持っている……ということで断られることも本当にたくさんありました。でも、自分を信じて、そして、この作品を信じてくれた方々、プロデューサー、NHK の方々、お友達、企業、映画と全く関係ない企業の方々の「この作品をぜひ世に出してほしい」という思い、その力でこの作品が出来あがりました。そのありがたさ、重み、皆さんが信じて、私自身がこの作品を信じて、前進することの必要さ、大切さを、映画を作ることと同時に学ばせていただいたと思います。
黒沢清監督、深田晃司監督と仲良くさせていただいているのですが、今年劇場公開された３本、作品(黒澤監督の『スパイの妻〈劇場版〉』、深田監督の『本気のしるし 劇場版』、HIKARI 監督の『３７セカンズ』)が世界三大映画祭に選ばれました。それは、自分の作品だからということではなくて、世界から見た時に、「日本の映画作品は素晴らしいものだ」と、本当に皆さんがそう思っていらっしゃるということを肌で感じました。
187 本というすごい数の作品が毎年出ている中、映画を作りたいという製作の意欲というのはみんなにあって、なかなか作るのに力が必要なのですが、こうやって沢山のプロデューサーの方に今日お会いして、こんな賞をいただいたことも、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。これからも頑張っていきたいと思います。
今日皆さんに出会えたことをすごく感謝しております。これも縁なので、本当に日本の作品をどんどん世界に出していけるように力を合わせてがんばっていけたらと思っています。今日は本当にありがとうございました。

受賞者プロフィール　大阪市出身。高校在学中に交換留学で米国に滞在。帰国後、再渡米して南ユタ州立大学に入学し、舞台芸術、ダンス、美術を学んだ後、ロサンゼルス移住。CM, Music Video などに出演しながら、カメラマンとして活動し、映画の名門、南カリフォルニア大学院に入学、撮影と監督を学ぶ。2011 年に卒業制作で撮った短編『Tsuyako』が、世界各地の映画祭で上映され、数々の賞を

受賞した。19 年に初の長編『３７セカンズ』が、ベルリン国際映画祭パノラマ部門の観客賞と国際アートシネマ連盟賞を W 受賞。日本では、同年の東京国際映画祭での上映を経て、翌 20 年 2 月に全国公開。現在、米国の大手エージェンシーに所属し、ハリウッド、英国作品の撮影など複数のプロジェクトを進めている。

『３７セカンズ』　劇場公開日：２０２０年２月７日

脚本・監督：ＨＩＫＡＲＩ
プロデューサー：山口 晋　ＨＩＫＡＲＩ　シニアプロデューサー：土屋勝裕（NHK）　共同プロデューサー：松平保久 淺見朋子(NEP)
ラインプロデューサー:小泉朋　協力プロデューサー:柳本千晶 岩堀恭一 岩堀昭　撮影：江崎朋生 Stephen Blahut　照明:三善章誉
美術：宇山隆之　編集：Thomas A. Krueger　音楽：Aska Matsumiya　サウンドデザイン：Sung Rok Choi
挿入歌：CHAI＜Sony Music Entertainment(Japan)Inc.＞　録音:石貝洋　助監督:二宮孝平　VFXスーパーバイザー:小坂一順
キャスティング：おおずさわこ　ヘアメイク：百瀬広美　スタイリスト：望月恵　スクリプター：樽角みほり　制作担当：岡本健志
出演：佳山明　神野三鈴 大東駿介 渡辺真起子 熊篠慶彦 萩原みのり 宇野祥平 芋生悠 渋川清彦 奥野瑛太 石橋静河 尾美としのり 板谷由夏
製作:ノックオンウッド 共同製作:NHK/NHKエンタープライズ　配給:エレファントハウス ラビットハウス
〔日本/115分/原題:37Seconds/シネマスコープ/5.1ch/PG-12〕　（C）37Seconds filmpartners

『３７セカンズ』2016 年、世界のインディーズ作家の登竜門である「サンダンス映画祭」と NHK が主宰する脚本ワークショップで日本代表作品に選ばれ、映画化。身体に障害を持つ女性たちを日本全国で一般公募し、約 100 名の応募者の中から監督に見出された佳山明が主演を務める。自己表現を模索しようともがく中で、様々な人たちと出会い、思いもよらない展開でドラマティックにある一人の女性の成長を描く。ユマ 23 歳。職業「ゴーストライター」。生まれた時に、たった３７秒息をしていなかったことで、身体に障害を抱えてしまった主人公・貴田ユマ。親友の漫画家のゴーストライターとして、ひっそりと社会に存在している。そんな彼女と共に暮らす過保護な母は、ユマの世話をすることが唯一の生きがい。毎日が息苦しく感じ始めたある日。独り立ちをしたいと思う一心で、自作の漫画を出版社に持ち込むが、女性編集長に「人生経験が少ない作家に、リアルな作品は描けない」と一蹴されてしまう。その瞬間、ユマの中で秘めていた何かが動き始める。これまでの息苦しい生活から脱するため、夢と直感を信じて、新たに出会った人々と共に道を切り開いていくユマ。その先で彼女を待ち受けていたものとは…。

銀　賞

内山拓也 監督『佐々木、イン、マイマイン』

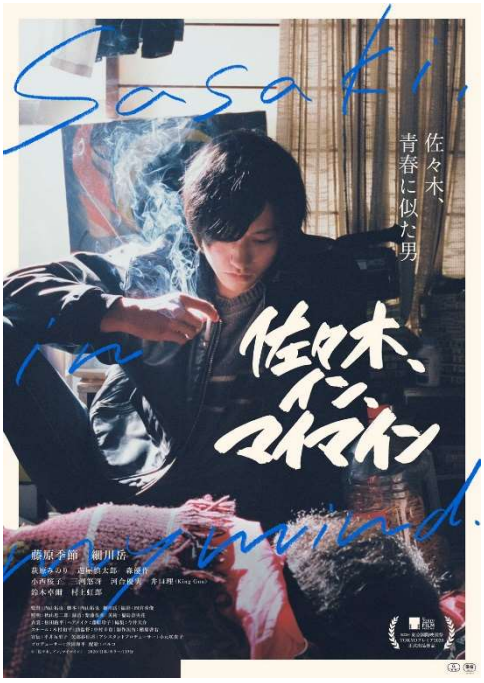
監督・脚本

受 賞 者 コ メ ン ト

この度はありがとうございます。監督をしました内山と申します。
皆さまがすごいちゃんと喋られたので、この若造は喋れないかもしれないという、もしかしたら敬語も使えないし、ということがあるかもしれないのですけども、なるべく伝えたいことを忘れないように言おうと思うので、話が散漫になってしまったらすみません。
（えっと、何から喋ろうかな）僕より年上の方々がいる前で、本当に言葉が出てこない。今年２８歳になったのですけども、この作品を企画した２５歳ぐらいから、４年が経って、今この場に立たせてもらっていて。自分は２０歳くらいから、映画館でアルバイトをしていたのですけども、ここにいる方々で、ああ、あの配給さんだとか、見たことがある方がいらっしゃるのですけども、アルバイトをしている時なので、その時は絶対、僕のことを、顔も名前も認識はしていなかったと思うのですけども、もし、良かったらこの顔を覚えて帰ってください。先ほど何名かに名刺交換させてもらったのですけど、もっと名刺持ってくれば良かったなぁと思って。もし、この後、名刺交換させていただくときに、名刺が無くなっていたらすみません。それだけ、この若造は配ったんだなと思っていただければ嬉しいです。HIKARI さんが受賞されて、先ほど講評いただいて、『３７セカンズ』は、僕も観させていただいたのですけども、頭ひとつ抜けていたようだったので、ぶっちぎりの２位だったのかなって思っています。自分の人生は、ここで語ることができるようないい人生じゃなかったのかもしれないんですけども、難しいのですけども、バカみたいに言えば、水泳大会はずっと２位だったし、マラソン大会もビリではないですけど、ずっと２位だったんですよね。
で、この銀賞は僕っぽいなぁっと思っています。ぴあフィルムフェスティバルという映画祭で、僕のことを見つけてくれた方々が（ちょっとごめんなさい）いらっしゃって、（ああ、やばい。泣きたくない）お会いできたのがうれしいなと思って。（何の話をしようとしたんだっけ）そうですね、僕の人生はずっ２位だったのですけども、最高の銀賞をいただいたなと思っていて、僕は、先ほど紹介したぴあフィルムフェスティバルもそうなんですけども、グランプリというか１位というかなんと言っていいのかわからないのですけども、人生で頂いたことがなくて、その度に僕はこんな性格なので、絶対に負けないと思ってこれまで生きてきて、初挑戦なんで、この賞をいただけたんですけども、その長編を撮って賞は本当に嬉しいし、190 名近くの方々を代表して今貰っているんで、その方々にも誇りに思っているのですけども、また、２番をちゃんと貰えたので、また僕は映画を作ろうと思えた。また頑張れと言われて

いるような気がしています。（後は何喋ろうとしたのだっけ）ここに沢山いらっしゃる方々、僕とは違うえらい方々がたくさんいるなぁと思うのですけども、この場所に、作品をプロデュースしたプロデューサー汐田と来たんですけど、２人なんですよね、こういう時ってもうちょっと大所帯で来るのかなと思いきや、２人で来て、僕ららしいなと思って。３７チームは…、チームだったように見えたんですけども、僕らは２人できて、ひっそりと、ここに壇上に上がる前にずっとどこにいたらいいんでしょうねと言っていたんですけども、そうやって作品を作ってきて、この場所に立たせていただくことを誇りに思うし、感謝しています。今、『佐々木、イン、マイマイン』は公開中なんですけども、なるべく外に出るなと言われている中で公開を迎えて…先ほど僕は逆境に向かっていくと申したんですけども、「ここまで逆境を選ぶのか、僕の人生は」と、今も思っているんですけど、もし、観ていない方がいらっしゃったら、ぜひ映画館で観てほしいなと思っていて、それはやっぱり僕は、映画館という場所に出会って、スタイリストをやっていた人生をやめて、映画にのめりこんだ少年だったので、やっぱり映画館が大好きで、というよりも、映画に人生を変えてもらってフリーターになった人生だったので、少なくともこの方々と一緒に、もちろん配信サービスとか素晴らしいことやっているし、僕もたくさん観るので、それはいいことだと思っているんですけども、少なくともこのみんなでは映画館を諦めないで盛り上げていきたいなぁと今でも本気で思っていて、この逆境中に、佐々木は公開していますけども、僕はまだ諦めないし、“若造だから”という枕詞で言わせてもらえれば、この作品で、ないし、今後の僕の人生で、この世の中の閉鎖的なものを打ち破ろうと今でも本気で思っているただの若造なので、よかったらその若造の夢に、気に入っていただければご一緒させてください。そういう方々かなと思っているので。なんて締めていいかわからないですけども、ここに立たせてくれたスタッフ、キャストに本当に感謝しています。選んでいただいた方にも勿論感謝しております。本当にありがとうございました。

受賞者プロフィール　1992 年 5 月 30 日生まれ。新潟県出身。文化服装学院に入学。在学当初からスタイリストとして活動するが、経験過程で映画に触れ、その後、監督：中野量太（「浅田家！」「湯を沸かすほどの熱い愛」など）を師事。23 歳で初監督作「ヴァニタス」を制作。同作品で初の長編にして PFF アワード 2016 観客賞、香港国際映画祭出品、批評家連盟賞ノミネート。近年は、King Gnu などのミュージックビデオや広告を手掛け、中編映画　『青い、森』が、11 月 6 日よりアップリンク吉祥寺ほか全国順次公開となる。



『佐々木、イン、マイマイン』　劇場公開日：２０２０年１１月２７日

監督：内山拓也　脚本：内山拓也　細川岳
撮影：四宮秀俊　照明：秋山恵二郎　録音：紫藤佑弥　美術：福島奈央花　衣裳：松田稜平　ヘアメイク：藤原玲子
編集：今井大介　スチール：木村和平　助監督：中村幸貴　制作担当：槇原啓右　アシスタントプロデューサー：小元咲貴子
プロデューサー：汐田海平
出演：藤原季節　細川岳　萩原みのり　遊屋慎太郎　森優作 小西桜子　三河悠冴　河合優実　井口 理（KingGnu）　鈴木卓爾　村上虹郎
配給：パルコ　製作：Shake,Tokyo

2016 年には初めて映像制作に臨んだ作品『ヴァニタス』が初の長編にして PFF アワード 2016 観客賞を受賞し、人気バンド「King Gnu」や平井堅の MV などを手がける内山拓也監督の青春映画。『佐々木、イン、マイマイン』は、俳優・細川岳が、自身の出演作『ヴァニタス』を監督した内山監督に、自身の高校時代の同級生とのエピソードの映画化を持ちかけたところからプロジェクトがスタートした。佐々木とその仲間たちの過去と現在を通して、観る人すべての心の中にいる“ヒーロー”を甦らせ、青春時代特有のきらめきと、愛おしくも戻らない日々への哀愁をストレートに描き出す。

俳優になる夢を抱えて上京したものの、鳴かず飛ばずの日々を送る２７歳の悠二。彼はある日、“俺たちのヒーロー” だった佐々木との高校時代と仲間たちとの日々を思い起こす。常に周りを巻き込みながら、爆発的な生命力で周囲を魅了していく佐々木。だが佐々木の身に降りかかる"ある出来事" をきっかけに、保たれていた友情がしだいに崩れていく----。

プロデューサー賞

岡本英之氏、高田 聡氏、山本晃久氏　『スパイの妻＜劇場版＞』

受賞者コメント

岡本英之氏　この度はありがとうございます。新藤兼人賞・プロデューサー賞、大変光栄なことです。
プロデューサーと一口に申しましても様々な役割があるかと存じます。この『スパイの妻』という作品は、後ろに並んでいる高田プロデューサー、そして山本プロデューサー、そして、この場にいらっしゃらない、或いはそちらの座席から見守ってくださっているプロデューサーと、数多くのプロデューサーの努力のもとに成立した作品です。僭越ながら、私ども三名が代表して賞をいただきます。本当にありがとうございます。日本映画製作者協会の理念にございますとおり、日々、自主独立の精神をもってこれまで取り組んでまいりましたが、報われることは決して多くはない中、精神の揺らぎとでもいうべきものの中に、身を置く瞬間もございました。そういった過程を経て、このような賞をいただき、本当に嬉しく思いますし、そういった精神の揺らぎとでもいうべきものへの戒めとしてこの賞をいただいて、感謝の言葉に代えさせていただきたいと思います。最後に黒沢監督をはじめ、すべてのスタッフの皆さま、そして、共に歩んできた仲間に、心から感謝を申し上げます。

高田 聡 氏　この度は、このような歴史と重みのある賞をいただけて大変光栄に思うと同時に、また、その責任をひしひしと感じているところです。スパイの妻のプロデューサーとして今こちらに三名がこちらにおりますが、先ほど岡本の話にもありましたようにスタッフの皆さまの力でできた作品ですので、代表して受け取っているという気持ちでいます。今後もこの賞に恥じないように独立精神を持って映画製作を続けていきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

山本晃久 氏　３人目ともなると言いたいことも全部言われています。私はもともと東宝サービスという会社にいました。ここにいる素晴らしいプロデューサーの方々にいじめられながら、いえ、ご指導いただきながら仕事してきたのですが、この素晴らしい壇上に立たせていただいていて、最初に私事で恐縮ですが申し上げておきたいことがあります。弊社（C&Iエンタテインメント）の代表である久保田修が、どこの馬の骨のもの、とは言いませんが、プロデューサーの資質があるかどうかもわからない中、拾って育ててくれたことへの感謝の気持ちを申し上げたいと思います。ありがとうございました。プロデューサーとして、面白いものをただ一心不乱に作っていこうと日々思っているのですが、面白いものとは何なのかいまだにわからないですし、これからも探求し続けようと思っています。今、Netflixさんとか、Amazonさんとか、各社配信が押し寄せ、映画の興行が揺らいでいるということがあると思います。ただ、やっぱり面白いものを作れば観客とのつながりは常に強固になるだろうと信じていますし、こちらにいらっしゃる皆さんもそう思っていらっしゃると思います。『スパイの妻』も、恐らくその一つだったと思います。今後も、この賞を糧に、ひたすら面白いものを作るということを心掛けてまいりたいので、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いします。また、新藤兼人さんの名前を冠するこの賞を運営されている皆さまと、ここにいらっしゃる素晴らしい製作者の方々に感謝の言葉を述べて私の挨拶の結びとさせていただきます。ありがとうございました。

受賞者プロフィール

岡本英之
『スパイの妻 ＜劇場版＞』 エグゼクティブプロデューサー
1979年生まれ。岡山県出身。株式会社Sunborn所属。プロデューサーとして映画制作から出版、メディア運営まで幅広く手掛ける。主な映画作品に濱口竜介監督『不気味なものの肌に触れる』（13）『ハッピーアワー』（15）など。表現を通じ、地域の魅力を発信するプロジェクト「マチビト」のプロデューサーとして、菊地健雄監督『神楽坂とお酒のハナシ』（16）を制作、クライミングと音楽の祭典「瀬戸内JAM」を企画・運営するなど、地域ブランディングにも取り組んでいる。2017年、高田等とクリエイティブ事業を目的に有限責任事業組合Inclineを組成。

高田 聡
『スパイの妻 ＜劇場版＞』 エグゼクティブプロデューサー
1977年生まれ。2002年に東京大学文学部を卒業後、システムエンジニアとしてソフトウェア関連企業数社に勤務の後、2006年（株）NEOPA取締役に就任。技術統括を行う傍ら、『ハッピーアワー』等の映画製作に携わる。2017年、岡本等とクリエイティブ事業を目的に有限責任事業組合Inclineを組成。

山本晃久
『スパイの妻 ＜劇場版＞』 プロデューサー
1981年兵庫県西宮市生まれ。2003年日本映画学校卒業。東宝スタジオサービス勤務を経て、12年よりC&Iエンタテインメントに所属。14年にTVドラマ「アラサーちゃん 無修正」でプロデューサーデビュー。その後、TVドラマ 『その「おこだわり」、私にもくれよ！』「山田孝之のカンヌ映画祭」 「山田孝之の元気を送るテレビ」 「名刺ゲーム」 「恋のツキ」 「このマンガがすごい！」 「ぴぷる-AIと結婚生活はじめました-」 「全裸監督シーズン２」 、映画 『泣き虫ピエロの結婚式』 『春なれや』『山田孝之 ３D』 『MISS OSAKA』 などのプロデューサーとして企画および制作を行う。17年『彼女がその名を知らない鳥たち』が日本アカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞。18年『寝ても覚めても』がカンヌ国際映画祭コンペ選出作品。現在は濱口竜介監督最新作『ドライブ・マイ・カー』を制作中。また、森義仁監督の長編映画デビュー作『ボクたちはみんな大人になれなかった』を準備中。

『スパイの妻＜劇場版＞』　劇場公開日 2020 年 10 月 16 日

監督：黒沢 清　脚本：濱口竜介 野原 位 黒沢 清　音楽:長岡亮介
エグゼクティブプロデューサー：篠原圭 土橋圭介 澤田隆司 岡本英之 高田聡 久保田修　プロデューサー：山本晃久
アソシエイトプロデューサー：京田光広 山口永　ラインプロデューサー：山本礼二　技術：加藤貴成　撮影：佐々木達之介
照明：木村中哉　録音：吉野桂太　美術：安宅紀史　編集：李英美　スタイリスト：纐纈春樹　ヘアメイク：百瀬広美
VFX プロデューサー：浅野秀二　助監督：藤江儀全　制作担当：道上巧矢
出演：蒼井優　高橋一生　坂東龍汰　恒松祐里　みのすけ　玄理　東出昌大　笹野高史
制作著作：NHK　NHK エンタープライズ　Incline C&I エンタテインメント　制作プロダクション：C&I エンタテインメント
配給：ビターズ・エンド　配給協力：『スパイの妻』プロモーションパートナーズ　〔2020/日本/115 分/1:1.85〕
制作・著作：NHK,NHK エンタープライズ,Incline,C&I エンタテインメント

2020 年 6 月に NHK BS8K で放送された同名ドラマを、スクリーンサイズや色調を新たに劇場上映。『ハッピーアワー』の監督である濱口竜介、同じく同作の脚本家である野原位が集い、黒沢監督自身も含む３人でオリジナルストーリーを書き上げた。また、「ペトロールズ」のリードボーカル＆ギターであり、浮雲名義で「東京事変」のギタリストとしても活動している長岡亮介が、映画音楽を初めて手掛けた。「第７７回ヴェネツィア国際映画祭」コンペティション部門で日本映画として１７年ぶりとなる銀獅子賞受賞。

太平洋戦争前夜。愛と正義に賭けたふたりがたどり着くのは、幸福か、陰謀か――。
1940 年、聡子（蒼井優）は貿易会社を営む福原優作(高橋一生)とともに、神戸で瀟洒な洋館で暮らしていた。ある日､優作は、物資を求めて満州に渡ったが、偶然恐ろしい国家機密を知り、正義のためにその事実を世界に知らしめようとする。妻の聡子は、夫が反逆者と疑われ、スパイの妻と罵られようとも、愛する夫を信じて、ともに生きることを心に誓う。太平洋戦争開戦間近の日本で、夫婦の運命は時代の荒波に飲まれていく……。

審査総評　審査委委員長　孫 家邦（リトルモア）

コロナ禍の中、劇場は長期の休業を強いられ、映画産業全体が辛い一年だったにも関わらず、新人賞選考対象作品は近年最高の水準で素晴らしい作品が続々と公開され、“ヴィンテージイヤー”であったと断言してよいと思う。日本（いや世界か）の政治や経済の状況が、かなりハチャメチャになり（あるいは、なる予兆を示しはじめたことが）作り手たちの意識にももちろん反映され、当然の如く社会性を帯び、少数者への圧迫、格差社会が生み出した貧困、家族の問題、様々な行政や政治のシステムの劣化、そして閉塞感、そんな世界の有り様に“異議申し立て”をそれぞれのスタイルで試みる作品がかたまりになって産み出され始めた一年と記憶するべきなのかもしれない。

受賞作 2 作品はもちろん面白く観た。HIKARI さん、内山拓也さん、2 人とも演出力が、ずば抜けていた。表方の輝きを見事にとらえていた。監督が芝居を「観る力」が、どれほど大事なことかを痛感する 2 作だ。銀賞の「佐々木、イン、マイマイン」は公開されたばかり、皆様が劇場に足を運び御覧になることを祈る。

授賞を惜しくも逃した 7 作品も素晴らしかった。「プリズン・サークル」「なぜ君は総理大臣になれないのか」、本年もドキュメンタリーは力作揃いであったが、特にこの 2 作品の凄味は他の作品を圧倒した。対象に長い時間、誠実に向き合った 2 人の監督に最大限の敬意を表したい。「アイヌモシッ」福永壮志さんは、骨太の大器であることをこの映画で証明した。「世界」を実直に正確に把握し、こんなに見事に聖性までをも描けるものかとその手腕にほれぼれした。「おばけ」中尾広道さんは明らかに、ある種の「天才」である。逆立ちしても彼のように映画を作れないと思った。共同作業者がいれば映画がさらに豊潤になるのかどうか、それも判らぬが、とにかく次作を観たくて仕方がない作家だ。名手向井康介のシナリオを手に独特の世界観を構築したふくだももこさんの「君が世界のはじまり」は最後まで授賞を争った。やはり演出がうまい！なおかつ「お話」を語る技術が安定している。変な言い方だけどこの映画には「侠気」があふれている。

「泣く子はいねえが」も有力候補の一本だった。佐藤快磨さんの人間をじっと見つめる容赦ない描写は「いい映画」に欠くことのできないものだ。その清冽な視線が次回作でどのように深化し、どんな人を見つけるのか、期待は大きい。「人数の町」は一番チャレンジングなことをやってのけた映画だ。それほど多くはないだろう予算の中で、荒木伸二さんは近未来 SF の力作を生んだ。このような胆力を持った作家はいずれ必ずおおきな「広場」に登場する。その日が待ち遠しい。

最終選考に惜しくも届かなかったが、面白いなぁと個人的に思った作品を列挙する。

「つつんで、ひらいて」、「どこへ出しても恥かしい人」、「ダンシングホームレス」、「春を告げる町」、「水曜日が消えた」、「青くて痛くて脆い」、「ソワレ」、「ロストベイベーロスト」、「眠る虫」、「滑走路」、「空に聞く」。

審査員　荒木美也子（アスミック・エース）

まず、２０２０年度より審査会の一員に加えていただき、このような機会を頂けたからこそ、将来の日本映画界を担うであろう原石のような才能を秘めた方々に出会え、コロナ禍でもワクワクする瞬間を得られましたこと、孫審査委員長はじめ関係者の皆様に、心から感謝しております。諸々お導きいただき、ありがとうございました。さて、今年度前半は、緊急事態宣言下で、映画館がクローズになるなど、未曽有の事態に直面し、公開予定作が次々と延期に…。正直、新藤兼人賞もどうなるのかと案じました。が、最終的には、選考対象作品も１８７本となり、その中から、金賞・銀賞にふさわしい作品を選ぶことが出来、安堵しております。金賞の HIKARI 監督の『37 セカンズ』は、時代性あるテーマと作品のクオリティの高さに、これが商業映画長編監督第一作目かと、驚きを禁じ得ませんでした。また、『佐々木、イン、マイマイン』と『泣く子はいねぇが』は、作風が全く異なるなか、銀賞候補として甲乙つけがたかったです。前者は、虚実皮膜の面白さ、展開の驚き、作品の圧倒的熱量が、後者は、昔ながらの風習に今の地方の時代性をきちんと織り込んだウェルメイドさが魅力でした。他にも、独特の世界観が愛おしく思えた『おばけ』、役者の魅力を引き出した青春映画『君が世界のはじまり』、現代社会に一石を投じる『プリズン・サークル』、鑑賞後の観客の気持ちとタイトルが見事にリンクした『なぜ君は総理大臣になれないのか』、SF 設定でローバジェットのなか工夫に満ちた演出の『人数の町』、アイヌの血を引く 14 歳の目線で現代のアイヌ民族を描き、新鮮な驚きを憶えた『アイヌモシッ』など、最終選考に残った作品は、いずれも唯一無二の個性、独特の味わいがありました。また、最終選考作品外では、個人的に『いつくしみふかき』の演出に光るものを感じました。最後に、海外をベースに、グローバルな視点で題材を考える若い監督が増えてきていることはとても喜ばしく思います。夢は大きく、いずれ日本の映画界からも、ポンジュノ監督のように、言語の壁を超え、アカデミー賞作品賞を狙う監督が誕生することを期待します。

審査員　宇田川 寧（ダブ）

新型コロナウイルスの影響で公開が延期された作品もあった中で、本年度の新藤兼人賞対象として１８７作品が公開されたことを、まずは喜ばしく思います。どの作品も監督やスタッフキャストの想い入れある作品に違いなく、本賞を審査する立場として、自粛期間中にも新しい才能を数多く鑑賞することができたことは業界皆様のご尽力あってのものと感謝いたします。金賞のHIKARI 監督『３７セカンズ』は一見重い題材をポップに見せるセンスを感じ、監督の手腕は圧倒的だったと思います。銀賞の内山拓也監督『佐々木、イン、マイマイン』は後味の爽快感も含めてその“やんちゃさ”が印象に強く残りました。次回作が楽しみな監督です。どちらも俳優陣が輝いていて良かったですし、監督が描く力強いメッセージがストレートに響いてくる作品だったと思います。最終選考でも評価の高かった『君が世界のはじまり』『泣く子はいねぇが』『人数の町』は惜しくも受賞を逃しましたが、完成度は高く、今後の映画界でも活躍される監督の力量を感じました。最後に、本年度の選考は異例の事態の中でも充実したものでした。新藤代表理事、孫審査委員長をはじめとする審査会皆様の熱意があったことと、そこに参加できたことに改めて感謝いたします。

審査員　古賀俊輔　（ザフール）

２０２０年コロナ感染が世界中を席巻し、映画館が全国閉鎖という想像もしない事がおきました。今年の新藤兼人賞は成立するのか、とても不安な状態でしたが、結果、１８７本の対象作品が劇場公開されました。これはとても素晴らしいことだと思います。コロナに負けない多くの新人監督たちの思いを、映画を通して感じられた一年でした。さて、個人的には、『なぜ君は総理大臣になれないのか』の取材力に感服し、『アイヌモシリ』のドキュメンタリーの様な演出力にびっくりし、『泣く子はいねぇが』で孤独に落ちていく男をじっくり丁寧に描かれているのに感銘しました。審査員一同、議論を戦わせ、結果、金賞は『３７セカンズ』、銀賞は『佐々木、イン、マイマイン』となりました。金賞の『３７セカンズ』は他の作品より頭ひとつ飛び出ている作品だったと思います。障害者を扱う映画は過去にいくつもありましたが、こんなにもまっすぐ正面から向き合い、しかもエンタテイメントにまで昇華させているのは素晴らしいと思います。作家性とエンタメ性を見事に融合させた作品といえるでしょう。HIKARI 監督に脱帽です。銀賞の『佐々木、イン、マイマイン』は、荒々しく、思いがスクリーンにぶつかる様な映画でした。誰しもが経験している学生時代の喜びと悲しみ、そして友情が見事に描かれていました。何よりも、秀逸なエンディング。このラストはぜひ、映画館で見届けて欲しいと思います。最後に、残念ながら賞に到達しなかった多くの監督の皆さん。決して落胆しないでください。諦めたらそこで終わりです。これからも必ず映画を作り続けてください。チャンスはみんなに平等にあるのですから。

審査員　山本 章（ジャンゴフィルム）

今年は新型コロナウイルスの感染拡大の衝撃がグローバルレベルで日常生活を一変させました。映画業界もその影響を諸に受け沢山の映画が公開延期となり、予定していた撮影も中止や延期が相次ぎました。そんな中での２０２０年新藤兼人新人賞は例年とは違う審査進行となりました。映画館で鑑賞できない映画が増える中、止むを得ずＤＶＤによる審査も積極的に取り入れたことにより本賞発表の日を迎えられたことにご理解頂ければ幸いです。孫審査委員長の選考への熱意とリーダーシップに敬服致しますと共に、審査対象作品ＤＶＤを貸し出して下さったプロダクションや配給会社の皆様にも感謝致します。コロナ禍にも拘わらず本年度の選考対象作品は一昨年より多い１８７本でした。金賞の HIKARI 監督『３７セカンズ』は審査員全員一致で決定しました。障害のあるヒロインの自分探し、成長物語が温かくユーモラスに描かれていました。演技経験のない主人公や脇を固めるキャストの演出も素晴らしくカメラワークにも細かい拘りが感じられ見事だったと思います。銀賞は内山拓也監督『佐々木、イン、マイマイン』　でした。佐藤快磨監督『泣く子はいねえが』との僅差の受賞でした。内山監督の演出力、キャスト人陣の演技、カメラワーク共に目を見張るものがありました。受賞は逃しましたが最終選考に残られました他の７つの監督作品も甲乙付け難く選考には苦心しました。皆様方の今後の活躍を期待しております。

プ　ロ　デ　ュ　ー　サ　ー　賞　講　評

協同組合日本映画製作者協会　副理事長　桝井省志（アルタミラピクチャーズ）

岡本英之様、高田聡様、山本晃久様、プロデューサー賞受賞おめでとうございます。
みなさまが親炙し敬愛して止まない黒沢清監督のもとに、歴史ミステリーの傑作が誕生しました。

ゼロから物語を立ち上げそれを表現する映像を丁寧に獲得していく事こそ映画製作の真骨頂と考える私にとって、本作がオリジナル作品であることに何より感心し、しかも驚きでした。昨今の日本映画でオリジナル企画を立ち上げる事はなかなか困難で、ましてやそれを成功にまで導くことは奇跡に近いと言っても言い過ぎではないでしょう。それを受賞者は、見事、鮮やかに実現させたのですから、その手腕は迷うこと無く受賞に値するものです。とはいえ、きっと実現までの道のりは困難の連続だったに違い有りません。
岡本英之氏、高田聡氏の両プロデューサーは、東京藝大で黒沢清門下生であった『ハッピーアワー』監督の濱口竜介氏と野原位氏に脚本を持ちかけました。「神戸を舞台にした映画にしたい」そんなところから企画は始まっています。得てして、オリジナル企画のキッカケはそんな漠然としたものでありがちですが、その動機への熱い思いが企画を育み醸成させていきます。本作でも、その後、濱口監督の『寝ても覚めてもの』のプロデューサー山本晃久氏が参画し、実現の道を一気に突き進むことになります。受賞者各氏の繋がりと黒沢監督の育んだ縁が絡み合ってこの映画は生み出されたのです。とりわけ山本プロデューサーは、長年東宝スタジオの営業マンとして数多くの映画制作の現場を陰から支えた人物です。若かりし頃からの実直でひた向きな姿勢が、今の活躍の根底にあります。そして、そんな彼をしっかり支えたのが久保田修氏率いるＣ＆Ｉエンタテインメントです。その存在も決して忘れてはなりません。この映画の成功は日本映画に新たな希望をもたらしてくれました。改めて「スパイの妻」の実現と成功に寄与したみなさんすべてに拍手を送りたいと思います。　プロデューサーのみなさんが次に何を企んでいるのでしょうか、ワクワクしているのは私だけではない筈です。

金　賞　・　銀　賞
最終候補監督/作品

【2020 年度選考対象となった新人監督作品 187 タイトルの中から最終候補として選出、発表された監督/作品】

（敬称略/劇場公開順）

坂上 香	『プリズン・サークル』
HIKARI	『37 セカンズ』
大島 新	『なぜ君は総理大臣になれないのか』
中尾広道	『おばけ』
ふくだももこ	『君が世界のはじまり』
荒木伸二	『人数の町』
福永壮志	『アイヌモシッ』
佐藤快磨	『泣く子はいねぇが』
内山拓也	『佐々木、イン、マイマイン』